

「二〇一〇年度本試験 第一問」次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

←1段落のディスリ構文（赤点線）は7段落の条件分岐で裏返されている（赤点線と赤斜線）※ただし、理屈っぽい文章と感じた時、まず結論付近で解消されるディスリから確認すべき

① 個人の本質はその内面にあると見なす私たちの心への（あるいは内面への）信仰は、私生活を重要視し、個人の内面の矛盾からも内面を推し量ろうと試みてきた。もちろん、このような解釈様式そのものは近代以前からあったかもしれない。しかし、近代ほど内面の人格的な質が重要な意味をもち、個人の社会的位置づけや評価に大きな影響力をもって作用したことはなかっただろう。個人の内面が、社会的重要性をもってその社会的自己と結び付けられるようになるとき、内面のプライバシーが求められるようになったのである。

② プライバシー意識が、内面を中心として形成されてきたのは、この時代の個人の自己の解釈様式に対応しているからだ。つまり、個人を知る鍵はその内面にこそある。たしかに自己の所在が内面であるとされているあいだは、プライバシーもまた、そこが拠点になるだろう。社会的自己の本質が、個人のうちにあると想定されているような社会文化圏では、プライバシーのためのボウヘキは、私生活領域、親密な人間関係、身体、心などといった、個人それ自体の周囲をとりまくようにして形づくられる。つまり、個人の内面を中

心にして、同心円状に広がるプライバシーは、人間の自己の核心は内面にあるとする文化的イメージ、そしてこのイメージにあわせて形成される社会システムに対応したものである。

③ 個人の自己が、その内面からコントロールされてつくられるという考え方は、自分の私生活の領域や身体

のケア、感情の発露、あるいは自分の社会的・文化的イメージにふさわしくないとされる表現を、他人の目から隠しておきたいと思う従来のプライバシー意識と深くかわっている。このような考え方のもとでは、個人のアイデンティティも信用度も本人自身の問題であり、鍵はすべてその内面にあるとされるからである。

④ これは個人の自己の統一性というイデオロギーに符合する。自己は個人の内面によって統括され、個人はそれを一元的に管理することになる。このような主体形成では、個人は自分自身の行為や表現の矛盾、あるいは過去と現在との矛盾に対し、罪悪感を抱かされることになる。というのも自分自身のイメージやアイデンティティを守

守ることは、ひたすら個人自らの責任であり、個人が意識的にこなしていることだからだ。このとき個人の私生活での行動と公にしている自己表現との食い違いや矛盾は、他人に見せてはならないものとなり、もしそれが暴露されれば個人のイメージは傷つき、そのアイデンティティや社会的信用もダメージを受ける。

⑤ ただし、このような自己のコントロールは、他人との駆け引きや戦略というよりは、道徳的な性格のものであり、個人が自らの社会向けの自己をイジするためのものである。だからこのことに関する個人の隠蔽や食い違いには他人も寛容であり、それを許容して見て見ぬふりをしたり、あるいはしばしば協力的にさえる。アーヴィング・ゴフマンはこうした近代人の慣習を、いわゆる個人の体面やメンツへの儀礼的な配慮として分析し、その一部をウェステインなどのプライバシー論が、個人のプライバシーへの配慮や思いやりとしてとらえた。

⑥ だが人びとは、他人のプライバシーに配慮を示す一方で、その人に悪意がはたらくときには、その行為の矛盾や非一貫性を欺瞞ととらえてコウゲキすることもできる。たとえばそれが商業的に利用されると、

私生活スキャンダル報道も生まれてくるのだ。

7 **しかし**、もし個人の内面の役割が縮小し始めるならば、プライバシーのあり方も変わってくるだろう。情報化が進むと、個人を知るのに、**必ずしもその人の内面を見る必要はない**、という考えも生まれてくる。

たとえば、個人にまつわる履歴のデータさえわかれば十分だろう。その方が手軽で手っ取り早くその個人の知りた側面を知ることができるとなれば、個人情報を通じてその人を知るというやり方が相対的にも多く用いられるようになる。場合によっては知られる側も、その方がありがたいと思うかもしれない。自身自身を評価するのに、他人の主観が入り交った内面への評価などよりも個人情報による評価の方が、より客観的で公平だという見方もありうるのだ。だとすれば、たとえ自己の情報を提供し、管理を受け入れなければならないとしても、そのメリットはある。

8 「人に話せない心の秘密も、身体に秘められた経験も、いまでは情報に吸収され、情報として定義される」とウィリアム・ボガードはいう。私たちの私生活の行動パターンだけではなく、趣味や好み、適性までもが情報化され、分析されていく。「魅惑的な秘密の空間としてのプライバシーは、かつてはあったとしても、**もはや存在しない**」。

ボガードのこの印象的な言葉は、現に起こっているプライバシーの拠点の移行に対応している。個人の身体の周りやヒフの内側とその私生活のなかにあったプライバシーは、いまでは個人情報へと変換され、個人を分析するデータとなり、情報システムのなかで用いられる。ボガードはいう「観察装置が、秘密のもつ魅惑を観察社会のなかではぎとってしまった」。そして「スクリーンは人びとを「見張る」**のでも**、プライバシーに「侵入する」**のでもなく**、しだいにスクリーンそのものがプライバシースクリーンになりつつある」と。

9 スクリーンとは、ジョージ・オーウェルの小説『一九八四年』に登場するあのスクリーン、すなわち人びとのありとあらゆる生活を監視するテレスクリーンのことである。この小説では、人びとは絶えずテレスクリーンによって監視されていることが、プライバシーの問題になっていた。**しかし**今日の情報化社会では、プライバシーは監視される人びとの側にある**のではなく、むしろ監視スクリーンの方にある**。つまり個人の内面や心の秘密をとりまく私生活**よりも**、それを管理する情報システムこそがプライバシー・ホゴの対象となりつつある。

10 「今日のプライバシーは、**管理と同様、ネットワークのなかにある**」とボガードはいう。だから**プライバシーの終焉は妄想であると。だが、それでもある種のプライバシーは終わった。ここに見られるのは、プライバシーと呼ばれるものの中身や性格の大きな転換である**。「今日、プライバシーと関係があるのは、『人格』や『個人』や『自己』、あるいは閉じた空間とか、一人にしてみらうこととか**ではなく**、情報化された人格や、ヴァーチャルな領域」**なのである**。そして、情報化された人格とは、ここというデータ・ダブルのことである。

「二〇一〇年度本試験 第一問」次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 個人の**本質**は、その内面にあると**見なす**。私たちの心への（あるいは内面への）信仰は、私生活を重要視し、**個人の内面**の矛盾からも**内面**を推し量ろうと試みてきた。もちろん、このような**解釈様式**そのものは近代以前からあったかもしれない。しかし、近代ほど**内面の人格的な質**が重要な意味をもち、個人の社会的位**置づけ**や評価に大きな影響力をもつて作用したことはなかっただろう。**個人の内面**が、社会的重要性をもつてその社会的自己と結び付けられるようになる**とき**、**内面**のプライバシーが求められるようになったのである。

② プライバシー意識が、**内面**を中心として形成されてきたのは、この時代の個人の自己の**解釈様式**に対応しているからだ。つまり、個人を知る鍵は**その内面**に**こそある**。たしかに自己の所在が**内面**であるとされて**いる**あいだは、プライバシーもまた、**そこが拠点**になるだろう。**社会的自己の本質が、個人のうちにあると想定**されているような社会文化圏では、プライバシーのための **ボウヘキは、私生活領域、親密な人間関係** **身体、心など**といった、個人それ自体の周囲をとりまくようにして形づくられる。つまり、**個人の内面**を心に**して**、同心円状に広がる**プライバシー**は、人間の自己の核心は**内面**にあるとする文化的イメージ、そしてこの**イメージにあわせて**形成される社会システムに対応したものである。

③ 個人の自己が、その**内面からコントロール**されて**つくられる**という考え方は、自分の私生活の領域や**身体**のケア、感情の発露、あるいは自分の**社会的・文化的イメージ**にふさわしくないと**思われる表現を**、他人の目から隠しておきたいと思う従来の**プライバシー意識**と深くかかわっている。このような考え方**のもとでは**、個人のアイデンティティも信用度も本人自身の問題であり、**鍵はすべてその内面にあるとされるからである**。

④ これは **個人の自己の統一性**というイデオロギーに符合する。自己は**個人の内面によって**統括され、個人はそれを一元的に管理することになる。このような主体形成では、個人は自分自身の行為や表現の矛盾、あるいは過去と現在との矛盾に対し、罪悪感を抱かされることになる。**というのも自分自身のイメージやアイデンティティを守ることは、ひたすら個人自らの責任であり、個人が意識的にこなしていることだからだ**。**このとき個人の私生活**での行動と公にしている自己表現との食い違いや矛盾は、他人に見せてはならないものとなり、もしそれが暴露されれば個人のイメージは傷つき、そのアイデンティティや社会的信用もダメージを受ける。

⑤ **ただし**、このような自己の**コントロール**は、他人との駆け引きや戦略というよりは、道徳的な性格のものであり、個人が自らの社会向けの自己を **イジ**する**ため**のものである。だからこのことに関する個人の隠蔽や食い違いには他人も寛容であり、それを許容して見て見ぬふりをしたり、あるいはしばしば協力的にさえる。アーヴィング・ゴフマンはこうした近代人の慣習を、いわゆる個人の体面やメンツへの儀礼的な配慮として分析し、その一部をウェステインなどの**プライバシー論**が、個人の**プライバシーへの配慮**や思いや

りとしてとらえた。

⑥ だが人びとは、他人のプライバシーに配慮を示す一方で、その人に悪意がはたらくときには、その行為の矛盾や非一貫性を欺瞞ととらえて、コウゲキすることもできる。たとえばそれが商業的に利用されると、私生活スキャンダル報道も生まれてくるのだ。

⑦ しかし、もし個人の内面の役割が縮小し始めるならば、プライバシーのあり方も変わってくるだろう。情報化が進むと、個人を知るのに、必ずしもその人の内面を見る必要はない、という考えも生まれてくる。

たとえば、個人にまつわる履歴のデータさえわかれば十分だろう。その方が手軽で手っ取り早くその個人の知りたい側面を知ることができるとなれば、個人情報を通じてその人を知るといやり方が相対的にも多く用いられるようになる。場合によっては知られる側も、その方がありがたいと思うかもしれない。自身自身を評価するのに、他人の主観が入り交じった内面への評価などよりも個人情報による評価の方が、より客観的で公平だという見方もありうるのだ。だとすれば、たとえ自己の情報を提供し、管理を受け入れなければならないとしても、そのメリットはある。

⑧ 「人に話せない心の秘密も、身体に秘められた経験も、いまでは情報に吸収され、情報として定義される」とウィリアム・ボガードはいう。私たちの私生活の行動パターンだけではなく、趣味や好み、適性までもが情報化され、分析されていく。「魅惑的な秘密の空間としてのプライバシーは、かつてはあったとしても、もはや存在しない」。ボガードのこの印象的な言葉は、現に起こっているプライバシーの拠点の移行に対応している。個人の身体の周りやヒブの内側とその私生活のなかにあったプライバシーは、いまでは個人情報へと変換され、個人を分析するデータとなり、情報システムのなかで用いられる。ボガードはいう。

「観察装置が、秘密のもつ魅惑を観察社会のなかではぎとってしまった」。そして「スクリーンは人びとを「見張る」のでも、プライバシーに「侵入する」のでもなく、しだいにスクリーンそのものがプライバシー

シーになりつつある」と。
スクリーンとは、ジョージ・オーウェルの小説『一九八四年』に登場するあのスクリーン、すなわち大

びとのありとあらゆる生活を監視するテレスクリーンのことである。この小説では、人びとは絶えずテレスクリーンによって監視されていることが、プライバシーの問題になっていた。しかし今日の情報化社会では、

プライバシーは監視される人びとの側にあるのではなく、むしろ監視スクリーンの方にある。つまり個人の内面や心の秘密をとりまく私生活よりも、それを管理する情報システムこそがプライバシー ホゴの対象となりつつある。

⑩ 「今日のプライバシーは、管理と同様、ネットワークのなかにある」とボガードはいう。だからプライバシーの終焉は妄想であると。だが、それでもある種のプライバシーは終わった。ここに見られるのは、

プライバシーと呼ばれるものの中身や性格の大きな転換である。「今日、プライバシーと関係があるのは、

「人格」や「個人」や「自己」、あるいは閉じた空間とか、一人にしてもらうことではなく、情報化さ

れた人格や、ヴァーチャルな領域」なのである。そして、情報化された人格とは、ここであいうデータ・ダブルのことである。

(阪本俊生 『ポスト・プライバシー』)

[注]

- アーヴィング・ゴフマン—Erving Goffman (一九二二—一九八二) アメリカで活躍したカナダ人の社会学者。
- ウェスティン—Alan F. Westin (一九二九—) アメリカの公法・政治学者。
- ウィリアム・ボガード—William Bogard (一九五〇—) アメリカの社会学者。
- ジョージ・オーウェルの小説『一九八四年』——イギリスの小説家George Orwell (一九〇三—一九五〇) が著した *Nineteen Eighty-Four* (一九四九年発表)。

【exのグループ分け・設定課題・ディスリの解消地点の確認】

① exのあら読みと設定課題の把握、**8・9・10**段落からのディスリ構文の曖昧さの解消

「個人の本质とは」「その人を知る方法」／「プライバシーの定義」(設定課題)

↓これまでの「ある種のプライバシー」解釈が終わった(10段落)⇨プライバシーの定義の大きな転換期がやってきた。人々を見張る・監視する社会から「個人の内面や私生活と社会的自己との間の食い違いや矛盾(4段落)」を「見せないようにする配慮や思いやり」という捉え方(ex2)から、人々を観察する装置が個人の内面を情報化・データ化して映し出すヴァーチャル領域の遠隔監視スクリーニング(ex678)そのものが「プライバシー」と呼ばれるようになった。そして、人格は、データ・ダブル」として情報化された。

② exのグループ分け(文章のなかの対立関係が何となくつかめれば十分)

《魅惑的な秘密の空間、身体の周りや私生活のなか》《閉じた空間に一人にしてもらうこと》(ex8)
それは「個人が一元管理する意識およびイデオロギー」(ex1)によって、

「社会向けの自己を維持するため」のもの(ex2)で、「他人が道徳的に配慮すべきもの(ex2)」(だが同時に「攻撃も可能(ex3)」)

プライバシーの拠点の移行(ex5)
プライバシー保護の対象も、空想されてきたところから大きく変貌した(ex7)

個人にまつわる他愛ない履歴データ(ex5)、またそれを表示するスクリーンそのもの(ex6)
《個人を分析するデータ》《情報化された人格⇨データダブル》を管理するシステムが保護の対象(ex78)

③ 主なレトリックを使ってexの説明を試みる⇨筆者の構想の中にあつたストーリーを再構築

本文にはレトリックらしいレトリックは特になし。ただし、問5にて10段落に補足追加
今日、プライバシーはへる個人の外部に「データが生み出す分身(ダブル)」と関係がある

〔解決すべき課題〕

「個人の本质を知る方法」とその時代的变化 ——プライバシー定義の変化を中心に——

(i) 個人の内面に一元管理される社会的自己から知る場合

（システム上にデータのない、社会文化圏、社会システムの場合）

個人の「自己の統一性」というイデオロギーに従って（ex 1）、個人が自己責任で管理したものを「社会的自己」として

→ その個人々が体面やメンツを守るために見せたくない社会的自己と私生活との食い違いについては、

自身と他者との間で干渉しないための寛容さや協力が必要

a) 善意→ お互いに見ないように儀礼的、道徳的に配慮（ex 2）

b) 悪意→ 破綻した実態としての自己が暴露される（ex 3）

(ii) システム上の個人の情報から知る場合

履歴のデータ（ex 4）程度でも個人の評価は可能

情報システムと観察装置（ex 7 SF小説の「テレスクリーン」）が維持管理されていれば、

バーチャル領域の個人情報へと変換された「情報化された人格」

= 〈データが生み出す分身〉〈r データダブル〉から個人の評価は可能
（主たる引用学説：ウィリアムボガード（ex 5 6 8）より）

よって、

個人の社会的な本人らしさを知るために配慮すべき事柄、

すなわち「プライバシー（個人が個人であるための前提）」とは、

(i) 情報化以前 本人が体面を維持する余地、空間への配慮

(ii) 情報化以後 人格のデータ移行と閲覧システムの管理

〔設問〕

問1 「内面のプライバシー」（傍線部ア）とはどういうことか、説明せよ。

問2 「このような自己のコントロール」（傍線部イ）とあるが、なぜそのようなコントロールが求められるようになるのか、説明せよ。

問3 「情報化が進むと、個人を知るのに、必ずしもその人の内面を見る必要はない、という考えも生まれてくる」（傍線部ウ）とあるが、それはなぜか、説明せよ。

問4 「ボガードのこの印象的な言葉は、現に起こっているプライバシーの拠点の移行に対応している」

問5 傍線部オの「データ・ダブル」という語は筆者の考察におけるキーワードのひとつであり、筆者は他の箇所でも、その意味について、個人の外部に「データが生み出す分身（ダブル）」と説明している。そのことをふまえて、筆者は今日の社会における個人のあり方をどのように考えているのか、一〇〇字以上一二〇字以内で述べよ。

問6 傍線部a、b、c、d、eのカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a ボウヘキ b イジ c コウゲキ d ヒフ e ホゴ